



## 諸根勿來と私

史談讀書問

根本忠孝

拜啓 災後七日自始めて獨  
第に入りました。昨日より  
當方に失望と疲憊とを拂洗  
しております。次の散文歌  
御笑讀下さい。

◆裏跡に我れたたづみで十  
年の原稿拾ふ心かなしる。  
◆カーライル、ニウーテン  
の聲舌も斯くやらん一片  
灰燼に學徒はなく。

◆大野川右手に流れ枯れ  
しの、まばらの中にせきれ  
いのなく。

◆玉山の石屋にやどりて一  
人寂の夢にも君の姿見るか  
な。

右の葉書きによつても諸君が  
私を免る角學友として或る程  
と完璧の域に達せず、從つて  
智識の狹量、即ち淺學の境あ  
りとするも、同君の當時の著書を今日  
縣への眞の文化の開拓したる事  
人として、若しくは郷土現實  
文資料として、斯界の最高權  
威を得て「歴史地理」の出版

故に同君は昭和五年一月二十  
五日、西田の將來に於ける一  
學派を建つる郷土史界の研究  
會を兼ねて、大日本歴史地理學  
會の機關、即ち本邦の史學論  
文を有す者たる郷土文獻の研  
究を離れて、心ならずも其驛  
を離れて、心ならずも其驛  
を離れて。

左に私(根本橋月)だけの送  
辭を参考までに掲げて見る

勿來學人を送る。

五日、西田の將來に於ける一  
學派を建つる郷土史界の研究  
會を兼ねて、大日本歴史地理學  
會の機關、即ち本邦の史學論  
文を有す者たる郷土文獻の研  
究を離れて、心ならずも其驛  
を離れて、心ならずも其驛  
を離れて。

車中より甚だ失禮であり  
ますが……本日はお寒

く、且つ土曜日の忙しさ  
對して、左の如く述べられ  
た。

と、又本日は市中に民政

黨の政説演説會等あるに  
もかゝらず、斯くも多

數の御見送りをいただき

ましたことは、唯々感謝

致いたしました。

懇親の外はあります。

私は皆様の御恩に

報いる爲め、たゞへ郷士

を離れ、上京しましても

駄くまで本職及び本郡の

後援を聽くだけに止ま

り、他になんらの喧嘩も

したのである、見送る人、

冗語も、さゝやかもなく、

兩説群々として別れたので

ある。

何んといふ重篤な送別であ

る。

車の信號を吹笛にて知らず

御後援を二層石なもので

あります。

……皆様の御健康を祈

ります……。

この時刻に、車聲が發

車の信號を吹笛にて知らず

御後援を二層石るもので

あります。

……皆様の御健康を祈

ります……。

この時刻に、車聲が發

車の信號を吹笛にて知らず

御後援を二層石るもので

あります。

……皆様の御健康を祈

ります……。

この時刻に、車聲が發

車の信號を吹笛にて知らず

御後援を二層石のもので

あります。

……皆様の御健康を祈